バーブル・パーディシャーフとハイダル・ミールザー

——その相互關係——

閒野英二

十六世紀の前半、中央アジア出身の二人の王子たち、すなわちバーブル・パーディシャーフ Bābur Pādishāh とハイダル・ミールザー Haydar Mīrzā[1] によって、十四—十六世紀の中央アジア史に關する、二つのすぐれた歷史書が著わされた。チャガタイ・トルコ語によるバーブルの『バーブル・ナーマ』*Bābur-nāma* と、ペルシア語によるハイダルの『タリーヒ・ラシーディー』*Tārikh-i Rashidi* がそれである。この二つの史書は、例えていえば、中央アジア史學史の虛空に燦然と輝く二つの星である。この兩書より以前にも、また以後にも、中央アジアでは、これらに匹敵する史書は一つとして著わされていない。

このように、古來すぐれた史書に乏しい中央アジアで、十六世紀の前半、なぜ卓越した史書が、二種類も生み出され得たのか。この、單純ながら重要と思われる疑問は、管見の及ぶ限りでは、これまで何人によっても提出された事がなく、從って、それに對する解答も、從來まったく與えられていない[2]。本稿は、自ら設定したこの疑問への解答を、自ら模索しようとする一つの試みである。

さて、この設問に答えるためには、

(1)この二人の著者をとりまいた、十六世紀前半を中心とする中央アジアの文化的狀況、特に當時の中央アジアの人びと

の歴史に對する關心の度合いの究明、すなわち、この二つの史書の成立の前提となった一般的文化狀況の究明

(2)この二人の著者どうしの關係と、兩者の直接的な交流の跡の解明、すなわち、二人の著者の相互影響の可能性の有無の解明

(3)この二つの史書の構成、內容、敍述樣式等に見られる類似點と相異點の檢討、すなわち、兩書の內的な相互關係の比較・檢討

がまず必要とされるであろう。

この三つの問題の內、本稿では、紙幅の關係から、(2)の問題のみを扱い、(1)(3)については別の機會に論ずる事とする。すなわち本稿では、まず第一に、バーブルとハイダルの親族・血緣關係と、モグーリスターン・ハーン家を中にはさんでの、バーブルの一族とハイダルの一族の交流の實態を檢討する。ついで第二に、バーブルとハイダルの直接的な交流をあとづけ、第三に、バーブルとハイダルのお互いどうしの評價がいかなるものであったかを明らかにする。そして結論的には、バーブルとハイダルが、單に從兄弟どうしという、きわめて近しい親族關係にあったというのみでなく、この兩名が、彼らの一族どうしの閒で見られた、ハーン家を中にはさんでの密接な交流を背景に、きわめて親密な交流關係を持っていた事、そしてその直接的な交流を通じて、この兩名がお互いをきわめて高く評價していた事を確認したい。

そして將來、本稿で得られた結論と、本稿では扱い得なかった先の(1)(3)の問題に關する結論とを統合する事によって、ハイダルの『ターリーヒ・ラシーディー』が、バーブルの『バーブル・ナーマ』を一つの範として成ったものであると見られる事、すなわちハイダルがバーブルの大きな影響のもとに、自らの史書を執筆したと思われる事を論證できればと考えるものである。すなわち本稿は、この論證に向けての第一步にしかすぎない。それゆえに、本稿がそれ自體としては必ずしも完結した論考とはなり得ない事を、あらかじめ御了解願えれば幸いである。

一

まず、バーブルとハイダルの親族・血縁關係を檢討しておきたい。このため、バーブルが屬したティムール朝、ハイダルが屬したドゥグラート家、それにティムール朝・ドゥグラート家雙方と密接な關係にあったモグーリスターン・ハーン家という以上三者の親族・血緣關係を記した系圖を示すと、次表のごとくである。バーブルは系圖の右上に、ハイダルは右下に、それぞれゴチック體を用いて示されている。

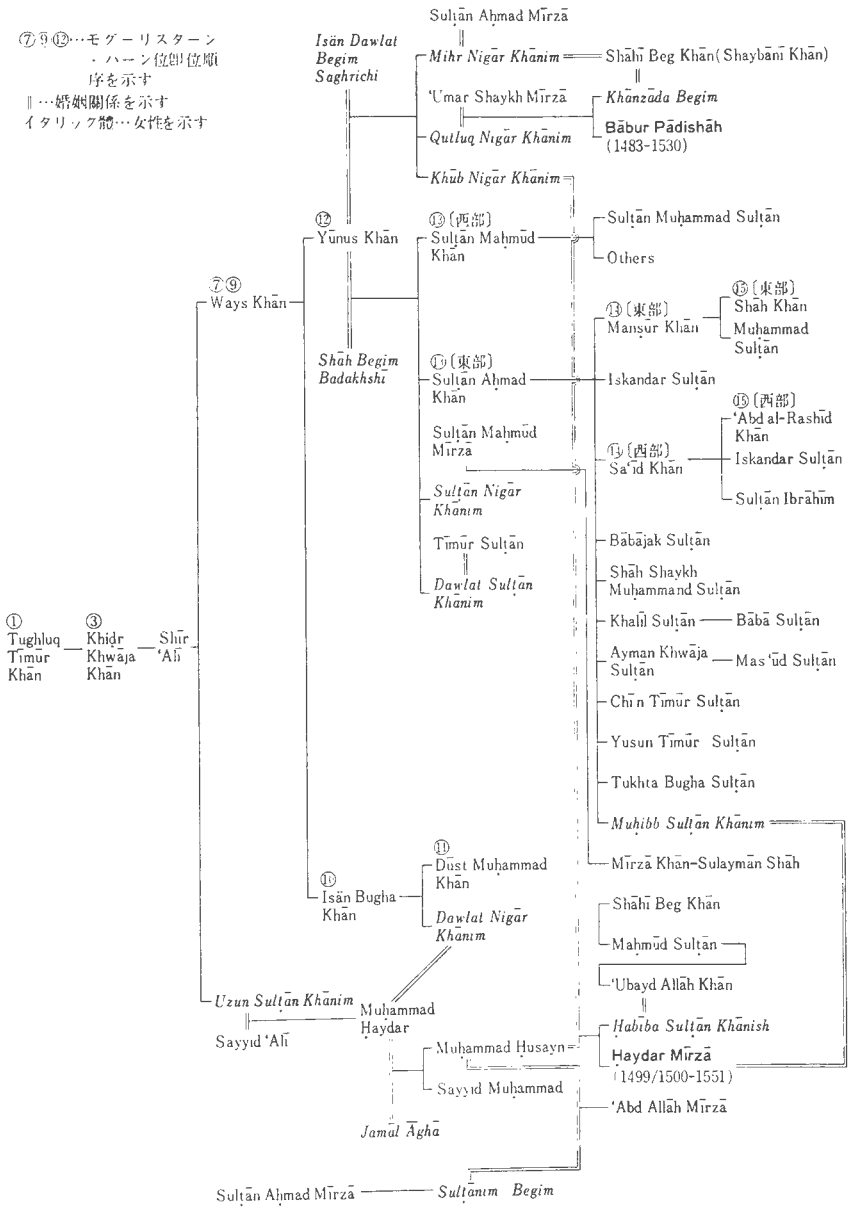
この系圖から明らかなごとく、バーブルの父は、ティムール朝フェルガーナ領國の君主（ヴイラーヤト　パーディシャーフ）ウマル・シャイフ・ミールザーであり、母は、モグーリスターン・ハーン家第十二代目のハーン、ユーヌスの次女クトゥルク・ニガール・ハーヌムであった。

一方、ハイダルの父は、モグーリスターン・ハーン國で最も有力な一門であったドゥグラート家(3)の當主ムハンマド・フサインであり、その母は、ユーヌス・ハーンの三女フブ・ニガール・ハーヌムであった。

すなわち、バーブルとハイダルは、共にモグーリスターンのハーン、ユーヌスの孫であり、母が姉妹どうしという從兄弟の關係にあったのである。年齡的には、バーブルは一四八三年生まれ、ハイダルは一四九九ないし一五〇〇年生まれであったから、バーブルの方が十六・七歳年長であった。

ところで、この系圖に關連して特に注目されるのは、二人が共通の祖父として、ユーヌス・ハーンを持っていたという事實である。ユーヌス・ハーンは、十四世紀以降、天山山中の遊牧地帶を本據に東トルキスタンの定住地帶をも支配したモグーリスターン・ハーン國の第十二代目のハーン（在位〔西部モグーリスターン〕一四五七／五八～一四六四／六五、〔モグーリスターン全域〕一四六四／六五～一四八七(4)）であるが、このユーヌスは、その卽位以前、弟イセン・ブハとの權力爭いに破れ、その十三歳から四十一歳までの、實に二十八年閒を異鄕の地イランで過ごすという、モグールのハーンとしては特異

ティムール朝，ドゥグラート家，モグーリスターン・ハーン家關係系圖



な經歷の持主であった。そして、そのイラン滯在中に、ティムールの傳記『勝利の書』*Ẓafar-nāma* の著者としても名高い碩學シャラフッ・ディーン・アリー・ヤズディーらについてイラン・イスラム文化の精髓を學び、その身につけた深遠な學識の故に、イランのシーラーズでは「ユーヌス先生」Ustād Yūnus とまで呼ばれていた人物である（TR, 58b—59a/84—85）[5]。のち、フェルガーナのマルギーナーンでユーヌス・ハーンに初めて會った時の印象を、ナクシュバンディー教團の聖者で、バーブル、ハイダルの共通の師であったマウラーナー・ムハンマド・カーズィー Mawlānā Muḥammad Qāḍi は、

私たちは、ユーヌス・ハーンはモグール人だと聞いていた。そのため、私たちは彼の事を田舍者のモグール人で、起居振舞も、他の砂漠のトルコ人たちと同樣であろうと想像していた。ところが、私たちがハーンに實際に會ってみると、彼は言葉づかいもきれいで、〔イラン人のように〕濃いひげをはやし、タージーク的風貌をしていた。言動共にきわめて優雅であり、あのような人物は、タージークの間でも稀にしか見出せない程であった（TR, 67a/97—98）[6]。

とハイダルに語り、またこの時ハーンに會ったナクシュバンディー教團の長ホージャ・アフラール Khwāja Aḥrār も、ハーンの優雅な言動に感銘を受け、それまで、まるで邪教徒のごとく見なされていたモグールを眞の「イスラームの徒」(ahl-i Islām) と認め、ただちに周邊諸國のスルターンたちに書簡を送って、以後モグールを、邪教徒のごとく奴隷として賣買する事を禁止したという（TR, 67a/98）。

ハイダルは、祖父ユーヌスについては、

スルターン・ユーヌス・ハーンは、チャガタイ家のハーンらの中で、最高の並ぶ者のない人物であった。多くの點から見て、彼より以前に、彼の一族の中には、彼のごとき者は全く存在しなかった（TR, 109a/155）。

と最大級の讚辭をささげ、さらにユーヌスの長所を列擧して、

『コーラン』を正確に讀み、寫字にひいで、バランスのとれた性格で、人を魅了する美しい言葉を話し、人の話をた

だちに理解し、書道、繪畫など、溫和な性格に適した諸藝に秀で、歌や樂器にも通じていた。彼は十二年間マウラー ナー・シャラフッ・ディーン・アリー・ヤズディーのもとで修行し、諸方に旅した（TR, 109a/155）。

とその文人としての教養の高さを讃えると共に、

勇氣、勇猛さの點でも傑出し、特に矢を射る事にかけては並ぶ者が無かった（TR, 109b/155）。

とその武人としての才をも賞讃している。

このようにユーヌス・ハーンは、モグーリスターンでは稀な、完璧なまでにイラン・イスラム的教養を身につけた教養人であると共に、すぐれた武人でもあった。一方、その妻、つまりバーブルとハイダルの祖母に當たるイセン・ダウラト・ベギムも、バーブルが、

女性たちの中で、意見・判斷において私の祖母のイセン・ダウラト・ベギム程の者は稀であった。彼女はまことに聰明で思慮深かった。多くの公務はあの方の意見を聞いて行なわれていた（BN, 24b/I, 223）。(7)

と記しているごとく、聰明で思慮深く、すぐれた判斷力を所有する女性であった。彼女はまた、夫君ユーヌスが、タシュケンドでティムール朝のタシュケンド總督シャイフ・ジャマール・ハル Shaykh Jamāl Khar に捕えられた際、自らも捕えられ、總督の命令によってその部下の一人に與えられたが、彼女のテントを訪れたその人物を、侍女たちと共に短刀で殺害して自らの操を守った程の、氣丈な女性でもあった（TR, 64b—65a/92）。

このように、バーブルとハイダルは、きわめて傑出した人物を、共通の祖父母として所有していたのである。バーブルとハイダルが、共に、勇猛な武人、有能な政治家としてのみならず、卓越した文人としての名聲を後世に殘し得た理由の一つを、彼らがこのすぐれた祖父母から受けついだ「血筋の良さ」の中に見出す事ができると考える事には、おそらくほとんど問題はないであろう。

さて、バーブルとハイダルは、卓越した祖父母を共有する從兄弟どうしという、きわめて近い親族關係にあった。しか

し、いかに近い親族關係にあっても、お互いにあまり交流しあわない場合もある。バーブルとハイダルの場合はどうであったか。これについては、次章で具體的に檢討する事とし、ここでは、バーブルとハイダルの交流の、いわば前提ともいうべき、バーブルの一族とハイダルの一族の、ユーヌス・ハーンとその子マフムード・ハーンを中にはさんでの、交流の實情を檢討しておく事にしたい。

まず、バーブルの父ウマル・シャイフと義父ユーヌス・ハーンの關係を見ると、

〔タシュケンドで、ユーヌス・ハーンを幽閉していたティムール朝の總督〕シャイフ・ジャマール・ハルが殺害されて後、〔ユーヌス〕ハーンがモグーリスターンに歸ると、ハーンは、ミフル・ニガール・ハーヌムの妹に當たるクトゥルク・ニガール・ハーヌムを、〔ヒジュラ暦〕八八〇年（西暦一四七五／一四七六年）に、スルターン・アブー・サーイード・ミールザーの子ウマル・シャイフ・ミールザーに與えた。ハーンとウマル・シャイフとの間には、實の親子の間でも稀にしか見られぬ類の、眞の親愛關係が存在していた。ウマル・シャイフ・ミールザーは何度もモグーリスターンへ出かけ、一～二カ月間、そこに滯在した。そして時には、ハーンをアンディジャーンへと伴い歸った。ハーンは、いつも、一～二カ月間、ウマル・シャイフの館（ハーネ）に滯留した（TR, 65b—66a/96）。

とか、

結局、次の如く同意された。すなわち、〔ユーヌス〕ハーンは、冬毎に、アンディジャーンに來る事とする。ただし、全モグール・ウルスはモグーリスターンに殘る事とし、ハーンは從者（ahl-i khidmat）のみを連れてアンディジャーンに來る事とする。その際、ウマル・シャイフ・ミールザーは自らの領地（ヴィラーヤト）內の何處であれ、ハーンが望んだ土地をハーンに與える事とし、春になって、ハーンがモグーリスターンに歸ると、ウマル・シャイフが再びかの土地の領有權を回復する事とする（TR, 66a/96）。

とか記されているごとく、兩者の間には特別の親愛關係が存在し、兩者は常にお互いに往來しあっていたのである。もっ

とも、この親愛關係の背後には、ユーヌス・ハーンの援助を得て、兄スルターン・アフマドに代ってサマルカンドの王位に卽きたいという、ウマル・シャイフの「大いなる野望」(BN, 5b/I, 196)が隱されていた事も事實であった。實際、ウマル・シャイフは、兄スルターン・アフマドとの抗爭に當たっては、常にユーヌス・ハーンの援助をあおぎ、その見返りとして、ハーンにアフスィ Akhsī、マルギーナーン Marghīnān、サイラーム Sayrām 等の諸地域を賜與していたのである(TR, 66a—66b/96—97)。なお、シャイフ・ジャマール・ハルの歿後、タシュケンドはウマル・シャイフの支配下に置かれたが、一四八五年、この地は、ホージャ・アフラールの仲介により、ユーヌス・ハーンに與えられ、一四八七年、ユーヌスがそこで歿すると、その長子スルターン・マフムード・ハーンがこれを支配する事になるのである。

次に、ハイダルの父ムハンマド・フサインとユーヌス・ハーンの長子スルターン・マフムード・ハーンの關係を見ると、ハイダルが、

私の父ムハンマド・フサイン・キュレゲン(8)——アッラーフが彼の證(あかし)を輝かせ賜わん事を——は、前述した一族のカーシュガル撤退の時〔ヒジュラ曆八八五年〕から現時點に至るまで、ウマル・シャイフ・ミールザーのもとに居た二年閒(これについても旣述した)を除いては、常にスルターン・マフムード・ハーンに仕えていた。ハーンと私の父との關係はきわめて親密で、二人はいつも同じ部屋に居り、同じテントに居た。ハーンが居たテントの右側は私の父に〔父のテント用として〕定められていた。家計(buyūtāt)についても全く共同にしていた。それが何であれ、ハーンのために何かが持ってこられると、それと同樣のものが私の父のためにも持ってこられた。ハーンが馬で出かける時には、二頭の馬がひいてこられた。一頭に私の父が、他の一頭にハーンが乘るためであった。ハーンが新しい衣服を身につければ、同樣の衣服が私の父のためにも用意された。要するにどんな事であれ別々という事が全くなかった。ハーンがカラ・キョズ・ベギム Qara Köz Begim と結婚して以後は、ハーンは日中はほとんどずっといつもの部屋に〔私の父と共に〕居り、夜になるとハラムへ行き、私の父はその部屋に殘った。ハーンが玉座に座る時は、玉座の前

に小さな敷物が敷かれ、私の父がそれに座って玉座に寄りかかっていた。そしていつも一緒に國事を片づけていた。ハーンはいつも私の父に「私がハラムに行かねばならぬのは本當にすまぬ事だ。お前は部屋に殘って、まるで私の番兵のようだ。こんな事は私たちの友情關係に反するものだ」と云って謝っていた。このようにして〔ハーンの結婚後〕一年がたった時、ハーンは、私の父を、自分より一歳年長の姉フブ・ニガール・ハーヌムの婿に定めたのである。フブ・ニガール・ハーヌムは、ユーヌス・ハーンの第三女で、母はイセン・ダウラト・ベギムであった（TR, 80b/117)。

と述べているごとく、兩者は緊密この上ない關係にあった。ムハンマド・フサインがスルターン・マフムード・ハーンに仕えたのは、八八五年（一四八〇／一四八一年)、弱冠十二歳の年であったというが（TR, 72b/106—107)、以後の兩者の關係は、

スルターン・マフムード・ハーンは、終世、私の父を「ダシュ dash」と呼んでいた。モグール語で「友」の意味である（TR, 72b/107)。

とか、

スルターン・マフムード・ハーンは、ムハンマド・フサイン・ミールザーと非常に親しくなり、お互いに友人となった。そしてお互いを「ダシュ」と呼んだ。「友」の意である（TR, 74a/108)。

と記されているごとく、主從の關係というより、お互いに對等な「ダシュ」の關係であったのである。この「ダシュ」の關係の詳細は不明であるが(9)、おそらく、モンゴル帝國期のアンダ anda（義兄弟）の關係に類するもの(10)かと、筆者は推定している。なお、マフムード・ハーンは、一四九五年、モグールのタシュケンド領に屬したウラ・テペ Ura tepe とその周邊地方をムハンマド・フサインに與えた。その結果、ムハンマド・フサインは一五〇三年までウラ・テペに居住して、この地とその周邊一帶を支配した。かくしてハイダル・ミールザーも、一四九九ないし一五〇〇年、この地で誕生し(11)、この

地でその幼年期を過ごしたのである。

ハイダルの父ムハンマド・フサインとバーブルの父ウマル・シャイフの關係を見ると、八八六年冬(一四八二年一月頃)、ユーヌス・ハーンは、ウマル・シャイフが提供したオシュ地方(ヴィラーヤト)に滞在した。この時、ハーンは、ハイダルの祖父ムハンマド・ハイダル・ミールザーにオシュ地方を與え、春と共に、モグーリスターンに歸った。この際、ムハンマド・ハイダルはモグーリスターンに歸らず、オシュ地方に殘って、この地方を統治する事となったが、ハーンに賴んで、息子のムハンマド・フサインを、マフムード・ハーンのもとから、自分の手元に呼びよせた。しかし、ハーンがモグーリスターンに歸ると、ウマル・シャイフがオシュにダルガ dārūghā を派遣して來て、支配權の返還を求めたため、ムハンマド・ハイダルは、やむなく息子のムハンマド・フサインとサイイド・ムハンマドの兩名をウマル・シャイフに委ね、自らはカーシュガルに向かった(TR, 76a—76b/110—111)。このような事情により、ムハンマド・フサインは、以後「二年閒」(TR, 80b/117)を、ウマル・シャイフのもとで過ごした。そして後、再びマフムード・ハーンに仕える事になるのである。このように、バーブルの父とハイダルの父は、二年閒にわたって同じ土地で身近に生活した事があるのである。

一方、ハイダルの父と「ダシュ」の關係にあったスルターン・マフムード・ハーンとバーブルの關係を見ると、バーブルが、

〔スルターン・マフムード〕ハーンは、私にとっては、父や兄のごとき方であられた(BN, 31b/I, 233)。

と述べ、またハイダルが、

バーブル・パーディシャーフはスルターン・マフムード・ハーンのおいであったが、あたかも息子のようなものであった(TR, 111a/158)。

と述べているように、滿十一歳で不慮の出來事[12]のため父を失ったバーブルにとって、ハーンは單なる「おじ」というより、「父や兄のごとく」最も頼りにすべき存在であった。換言すれば、バーブルは、あたかもハーンの息子のような立場

にあったのである。そのため、バーブルは、ヒジュラ暦九〇〇年（一四九五年）、シャーフルヒーヤ城外でハーンに正式に面會して以後（BN, 32a/I, 233）、事あるごとにハーンの支援・援助を求めた。このようなバーブルに對して、ハーンが時には確かに「多くの愛情と溫情をお示しになった」（BN, 32a/I, 233）事は事實であろう。しかし、バーブルの期待に比べれば、バーブルがハーンから實際に得たものは、必ずしも多くはなかった。

例えば、一四九七年から九八年にかけてのバーブルの第一次サマルカンド統治の折、ハーンは、サマルカンドで窮地におちいったバーブルに對して、援助を與えるどころか、何とアンディジャーンの割讓を要求し、バーブルを困惑させているのである（BN, 51b/I, 261）。

また、この折、すなわち九〇三年（一四九八年）、バーブルはサマルカンドを放棄してアンディジャーンに向かったが、アンディジャーンが反亂者の手に渡ったため、ホジャンドからタシュケンドのマフムード・ハーンに援軍を求めた。ハーンは自ら兵をひきいて到着したが、「ハーンのちょっとした行軍の誤りのために」、バーブルの手中に入るはずであったペープ城も失われ、ハーンは、爲す所なく軍をかえした。バーブルは、この時のハーンの行動を、

> ハーンは、その他の行動や生活態度は良かったが、軍事とか指揮者としての資質の面では缺ける所が多かった。この場合も、もし彼がもう一行程進んでくれていたならば、まず戰う事なくあの地方を掌握できたはずであった（BN, 54b/I, 264）。

と批判的に敍述している。なおこの折、アンディジャーンへの歸還の展望も開けぬままにホジャンドにもどったバーブルは、サマルカンドへの再進擊を夢みて、ウラ・テペのムハンマド・フサイン（ハイダルの父）の支配下にあったパシャーガル Pashāghar を、九〇四年冬（一四九八年～一四九九年にかけての冬）、ムハンマド・フサインから借りうける事に成功し、冬の間は、この地を本據に周邊のヤール・ヤイラク Yar Yaylaq の諸城の攻略に從事している（BN, 59a—59b/I, 271—272）。この事實は、バーブルとムハンマド・フサインとの良好な關係を示すものである。なお、ハイダル・ミールザーが

ウラ・テペで生まれたのは、翌九〇五年の事である。

話を、ハーンとバーブルとの關係にもどすと、九〇六年から九〇七年（一五〇一年から一五〇二年）にかけてのバーブルの第二次サマルカンド統治の際も、サマルカンド城をウズベクのシャイバク・ハーン（シャイバーニー・ハーン）[13]に包圍され、長期の籠城に窮乏の極みに達していたバーブルに對して、マフムード・ハーンは援助の手をさし延べようとしなかった。このため、糧食を絶たれ、援軍到來の望みも失ったバーブルは、やむなくウズベクの和平の提案に應じ、サマルカンド城と自らの姉ハーンザーダ・ベギムをシャイバク・ハーンに引き渡す事によって、からくもサマルカンド脫出に成功するのである（BN, 91b—95a/I, 309—313）。

この脫出の際にも、バーブルは、ジザク、パシャーガルを經て、ハイダルの父ムハンマド・フサインの支配するウラ・テペに到達し、ムハンマド・フサインからウラ・テペの村々の一つであるディフケト Dikhket を冬營地として受取り、ここに家族を置いている。この事實も、バーブルとムハンマド・フサインの近しい關係を示すものである。

ついでバーブルは、

數日後、私も〔ハーンの母〕シャーフ・ベギム、おじのハーン〔スルターン・マフムード・ハーン〕、それに親類縁者らに會うためにタシュケンドに向かった。私は行って、シャーフ・ベギムとおじのハーンに挨拶し、數日間そこに滯在した（BN, 96b/I, 315）。

とあるように、タシュケンドにハーンの一族を訪れている。この訪問の目的は、バーブルが、

私は、おじのハーンが私に恩惠をほどこして、一地方（ヴィラーヤト）とか一區域（ベルゲオ）を與えてくれる事を希望した。ハーンはウラ・テペを約束された。しかし、ムハンマド・フサイン・ミールザーは〔その地を私に〕與えなかった。彼が自分の判斷で與えなかったのか、それとも上からの指示があったのか、私にはわからない（BN, 96b—97a/I, 315）。

と記しているように、ハーンからしかるべき領地を受領する事にあったが、結局、事情不分明のまま、その目的は達せら

れず、バーブルは越多地ディフケトにもどるのである。

バーブルは、このディフケト周邊に、春の到來まで滯在した。しかし將來に向けての展望は少しも開けなかった。當時の心境を、バーブルは、

私はふとこう考えた。このように山から山へと略奪・強奪しつつさまよい、領地もなく土地もなくこの方面に留まっているのは勸められた事ではあるまい。ハーンのもとへ、タシュケンドへ行こうと（BN, 99b/I, 318）。

と記す。またしてもバーブルは、父とも兄とも賴る、おじマフムード・ハーンのもとに身を寄せる事にしたのである。かくして、九〇七年ズィー・ヒッジャ月（一五〇二年六月）、バーブルはタシュケンドのハーンのもとに到着し、以後およそ一年近く、ハーンおよびモグーリスターンからやがて到着したハーンの弟スルターン・アフマド・ハーン（小ハーン）と行動を共にするのである。しかし、この間の心境を、バーブルはまた次のごとく記しているのである。

この間、私がタシュケンドに居た時、私は非常に困窮した貧苦の生活を送っていた。領地も無く、領地に對する希望も無かった。家來たちもほとんどが四散していた。殘った少數の者たちも、私の貧窮のため、私と生活を共にする事ができなかった。私はおじのハーンの宮廷へ出かける時にも、時にはたった一人、また時にはたった二人の伴を連れて行ったにすぎぬ。しかし有難い事に、ハーンたちは知らぬ人々ではなく、私と同じ血をひく人々であった。私はおじのハーンに顏を見せると、いつも〔その母の〕シャーフ・ベギムの所へもでかけた。私はそこに、自分の家に居る時と同樣に、ターバンもつけず、靴もはかずに入っていった。遂には、このような窮狀とこのような貧窮とによって、私は絶望的になった。私はこう思った。このような困難と共に生きるよりは、立ち去った方がましだ。私がこのような困窮と慟哭と共にある事を人に知られるよりも、足のおもむく限り進んだ方がましだと。私は中國（ヒターイ）へ行く事に決め、ここを去る決意を固めた（BN, 101a—101b/I, 321）。

すなわち、マフムード・ハーンに寄せたバーブルの期待はここでも完全に裏切られ、バーブルを「絶望的」な境地にす

ら追いやっていたのである。(14) 結局、バーブルの中國行きの計畫は、マフムード・ハーンの弟のスルターン・アフマド・ハーンが一千～二千の軍勢と共にモグーリスターンから兄のもとへ到着するという、豫期せぬ出來事のため、實現を見なかった。その後バーブルは、この二人のハーンと共に、フェルガーナの奪回をはかる事になるが、結局、彼らは九〇八年ズール・カーダ月（一五〇三年四月）、フェルガーナのアフスィ近郊のアルヒーヤーン Arḫiyān での戰に(16)、ウズベクのシャイバーニー・ハーンに完敗を喫し、兩ハーンはウズベクに捕えられ、バーブルはようやくにして「フェルガーナの南の山地へと脫出した（TR, 112a/159）」のである。そしてここに、タシュケンドを中心とするマフムード・ハーンの領地は、モグールの掌中から永遠に失われ、フェルガーナもまた同樣の運命にあった。バーブルも、これよりおよそ一カ年閒に及んだ流浪の旅の後、この地を捨ててホラーサーンへと向かい、やがて一五〇四年九月、アフガニスタンのカーブルの征服に成功するのである。なお、アルヒーヤーンの戰（アフスィの戰）の際、ウラ・テペの領主であったハイダルの父ムハンマド・フサインも、ウズベクの手をのがれて、南方のカラ・テギン方面へと脫出する事に成功している（TR, 114b/163）。

以上本章で述べて來た所を要約すれば、

(一)バーブルとハイダルは從兄弟どうしであった。

(二)バーブルの父ウマル・シャイフと義父ユーヌス・ハーンの閒には、實の親子の閒でも見られぬ程の親愛關係が存在した。

(三)ハイダルの父ムハンマド・フサインは、その十二歲の年から、ユーヌス・ハーンの長子スルターン・マフムード・ハーンに仕えたが、兩者は、主從というより、「ダシュ」すなわち親友關係にあった。

(四)數え年十二歲で父を失ったバーブルは、おじスルターン・マフムード・ハーンを「父や兄」のごとくに賴り、ハーンの「息子」のごときものと見なされていた。そのためバーブルは、窮地におちいるごとにこのおじを賴ったが、それに對するおじの對應は、必ずしも滿足できるものではなかった。しかし、バーブルには、この賴りがいのないおじに賴る以

外、他に頼るべき親族がいなかったのである。

(五)バーブルはまた、その困窮の時代に、ウラ・テペを領地とした、ハイダルの父ムハンマド・フサインからも、二度にわたって多営地を提供されるなど、好意的な扱いを受けた。

となる。

このように、バーブルの一族とハイダルの一族は、單にお互いに近しい親族であったというのみでなく、實際に、ユーヌス・ハーン、マフムード・ハーンを中にはさんで、きわめて密接に交流していたのである。そしてこのような密接な關係が、やがてハイダルの成長に伴って、ハイダルとバーブルとの間にも、次章に扱うごとき親密な關係を導き出すことになるのである。

二

バーブルとハイダルの直接的な交流としては、一五〇五年から一五〇七年にかけての一回目の交流と、一五〇九年から一五一二年にかけての二回目の交流との、前後二回にわたる交流をあげる事ができる。いま、これらの交流が、いかなる歴史の流れの中で生まれたものであるかを理解するために、交流に前後する主な出來事を、TR, BN の記述に依據しつつ、年表形式を用いて提示し、かつ交流そのものについては、やや詳細に說明すれば、以下のごとくである。

一四八三　バーブル生まれる。
一四九四　バーブルの父ウマル・シャイフ歿、バーブル卽位。
一四九七　(一一月)バーブル、サマルカンドに無血入城。
一四九八　バーブル、サマルカンドを去る(一〇〇日統治)。
一四九九／一五〇〇　ハイダル生まれる。

一五〇〇　ウズベク・シャーヒー・ベグ・ハーン（シャイバーニー・ハーン／シャイバク・ハーン）、サマルカンドを征服。ティムール朝サマルカンド政権滅亡[15]。（晩秋）バーブル、サマルカンドをウズベクの手から奪回。この頃ハイダルの母歿。

一五〇一　（五／六月）サリ・プルの戦でバーブル、ウズベクに敗れ、五カ月間サマルカンドに籠城。孤立無援のゆえ、バーブル、サマルカンドを放棄。

一五〇二　（六月）バーブル、タシュケンドのマフムード・ハーンのもとに身を寄せる。

一五〇三　（四／五月）アルヒーヤーン（アフスィ）の戦[16]。モグールのマフムード・ハーン、アフマド・ハーンの兄弟はウズベクに敗北し捕虜とされ、のち釈放される。バーブルもこの戦に参加したが、脱出に成功。ハイダルの父ムハンマド・フサインもウラ・テベより脱出。（冬）ムハンマド・フサイン、ヒサールのホスロウ・シャーフに破れ、家族と別れてフェルガーナ東部の山地へと逃走。この際、ハイダルは、姉・弟らと共にホスロウ・シャーフに捕えられ、やがてクンドゥズに移されて、ここで一年間を過ごす。

一五〇四　ウズベク、フェルガーナを征服。この時、ムハンマド・フサインはウズベクの「客」となり、シャーヒー・ベグ・ハーンに同行してサマルカンドへ行く。（九月）バーブル、カーブルを征服。ウズベクのマフムード・スルターン（シャーヒー・ベグ・ハーンの弟）、クンドゥズを征服。この地に捕えられていたハイダルらは、マフムード・スルターンに同行していた父ムハンマド・フサインと再會、父の領地シャフリ・サブズへ行く。

一五〇五　ムハンマド・フサイン、シャフリ・サブズよりハイダルを連れてホラーサーンに向かう。ムハンマド・フサインの目的はメッカへの巡禮であったが、折しも、サマルカンドからシャーフ・ベギム（モグールのマフムード・ハーンの生母。バーブル、ハイダルの義理の祖母）、ミフル・ニガール・ハーヌム（バーブル、ハイダルのおば）がヘラートに到着したため、メッカ巡禮をあきらめ、シャーフ・ベギムらと共にカーブルのバーブルのもとへ向かう。（六／七月）バーブルの母、カーブルで歿す。

(一) 一回目の交流

さて、ムハンマド・フサイン、ハイダル・ミールザー父子、それにシャーフ・ベギムらの一行がカーブルに到着したのは、バーブルの母クトゥルク・ニガール・ハーヌムが死去して、「四十日」が近づきつつあった一五〇五年夏のことであった。しかし、

バーブル・パーディシャーフは、喪中であったにもかかわらず、一行を出迎えに出て、いたれりつくせりのもてなしをした。彼らは、ここで、しばらくの間、最も快適に日々を過ごした（TR, 155b/196）。

とあるごとく、一行はバーブルによって暖かく迎え入れられた。この時、バーブルは満二十二歳、ハイダルは満五～六歳であった。

しかし、丁度この頃、ヘラートに君臨したスルターン・フサイン・ミールザーのもとからバーブルのもとへ、ティムール家の總力をかたむけての、ウズベク軍との戦に参加するようにとの要請があった。その上、バーブルの異母弟ジャハーンギールが突然不可解な行動に出て、領地のガズニーからホラーサーン方向へと出奔するという事件が勃發した。このためバーブルは、スルターン・フサインの要請に應ずると同時に、弟の行動をも掣肘したいという、二重の目的をもって、一五〇六年春（五／六月）、カーブルを發って、ホラーサーンへと向かった。[17] 實はこの一カ月ほど前（一五〇六年五月）に、ヘラートのスルターン・フサインは、ウズベクに向け進軍中に病死しており、バーブルのもとにも、やがてその知らせがとどくが、バーブルは考慮の末、そのホラーサーンへの旅を續行するのである。ところで、このホラーサーン行きに當たり、

〔バーブル〕パーディシャーフの出發が決まると、パーディシャーフは私〔ハイダル・ミールザー〕の父の部屋に來て、カーブルの重要事とその屬地の管理をひきうけてくれるようにと懇請した。しかし私の父は受諾せず、その言譯

として「私はホラーサーンに居る時、メッカ巡禮をする決心をしておりました。もし貴方の要請を受諾すれば、私の決心は全く無駄になってしまいます。貴方のアミールの中にはすぐれた方がおられます。その者にこの仕事をおまかせ下さい。もし私に相談でもあれば、あだやおろそかには致しません。私の力の限りをつくすつもりでおります」と答えた。パーディシャーフは、ニザームッ・ディーン・アリー・ハリーファ Niẓām al-Dīn ʿAlī Khalīfa、マウラーナー・バーバーイ・パシャーガリー Mawlānā Bābā-yi Pashāghārī、アミール・アフマド・カースィム・コーフバル Amīr Aḥmad Qāsim kōhbar、それに自分の部下の内の主だった者たち數人を連れて來て、「私は貴方を信頼して出發します。これらのアミールたちは、すべての重要事項を貴方の前で決定する事にしてあります」と述べ、ホラーサーンへと出發した（TR, 156a—156b/197）。

とあるごとく、バーブルは、建設して間もないカーブル王國の管理を、ハイダルの父ムハンマド・フサインの監督・指導の下にゆだね、ホラーサーンへと出發したのである。バーブルが、ムハンマド・フサインの力量を高く評價し、その人物にも全面的な信をおいていた事は、この記述からも明らかである。

しかるに、バーブルのホラーサーン滯在が長びくと、カーブルにはホラーサーンから種々の情報がもたらされ始めた。噂は噂を生み、やがてバーブルがヘラートでバディーウッ・ザマーン、ムザッファルの兩君主に捕えられ、投獄されていると考える者も出始めた（BN, 197a/II, 146; TR, 157a/198）。このような情況の中で、カーブル滯在中の、バーブルの義理の祖母シャーフ・ベギムは、自らの血を直接にひく〔系圖參照〕孫のミールザー・ハーンを、義理の孫にしかすぎぬバーブルに代ってカーブル王國の君主の位に即位させる事を執拗に主張した。すなわち一種のクーデターの企てであった。シャーフ・ベギムはムハンマド・フサインにこの計畫を告げた。ムハンマド・フサインは、はじめこの企てに斷固として反對した。しかし結局は、シャーフ・ベギムを說得する事ができず、ただ、この企てに直接參加する事だけは避けるために、カーブルから一日行程のバーラーン河畔にしりぞいて、事の成り行きを見まもった。シャーフ・ベギムと彼女を

(18)

支持するモグール人たちは、ミールザー・ハーンの名でフトゥバを讀み、カーブルの内城を包圍した。ムハンマド・フサインのもとへもシャーフ・ベギムのもとから何度も使いが到着し、反亂への參加が求められた。このため、彼もやむなく遂にこの反亂に參加したとハイダルは記す。しかし、彼らが内城を包圍して二十四日が經過した時、ヘラートからカーブルへの歸還の途上、この反亂についての情報を得たバーブルが、寒氣の中を急行軍でカーブルに到着し、反亂軍を擊破して、この反亂の鎭壓に成功するのである（BN, 197a—202a/II, 146—152; TR, 157a—158b/198—201）。この一五〇七年初頭におこったモグールの反亂の詳細について、いまここで論ずる餘裕はない。ここではただ、反亂鎭壓後に、バーブルがとった處置のみを簡單に述べておきたい。

さて反亂の鎭壓後、バーブルは、バーブルの前で「極度に、考えられないほど落着きを失い、混亂し、狼狽し、恥入り」「適當な言譯も云えず、丁重な挨拶の言葉を口に出す事すらできなかった（BN, 200a/II, 150）」シャーフ・ベギムとミフル・ニガール・ハーヌムを、以前と同樣に、最大の敬意をもって遇した。またバーブルは、「[ミフル・ニガール]ハーヌムの寢室に逃げ込み、マットレスの覆いにくるまっていた（BN, 201a/II, 151）」ムハンマド・フサインと、一たん逃走した末、捕えられて連行されて來たが、「動搖のあまり、膝まずいて私（バーブル）の所に挨拶のためにたどり着くまでに二度もころんだ（BN, 202a/II, 151）」ミールザー・ハーンの兩名をも、丁重に扱った末、その罪をゆるし、ホラーサーン方面へ出發する事をゆるした。バーブルが「たとえ私が八つ裂きにしたとて、彼はそれに十分に値する行動をとった」「種々責めさいなんだ末に殺すに値した（BN, 201b/II, 152）」と考えたムハンマド・フサインの罪をゆるしたのは、「私たちの間には、親戚關係があり、また彼には、私と同じ血をひくおばであるフブ・ニガール・ハーヌムから生まれた息子や娘たちがいたためであった（BN, 201b/II, 152）」と、バーブルは述べている。バーブルが、ムハンマド・フサインの處遇の決定に當たって、當時なお六～七歲の少年にしかすぎなかったハイダル・ミールザーらの存在に考慮をはらった事は、この記述からも明らかである。ハイダルは、罪を犯した父とバーブルとの最初の會見の模樣を、

パーディシャーフ〔バーブル〕は私の父を見ると、これまでと同じ丁重な物腰で、急いで前に進んだ。そして笑いながら朗らかに私の父を抱擁し、あれこれと親切な言葉をかけた（TR, 158a—158b/200—201）。

と記している。バーブルの寛大な態度が、不安におののく少年ハイダルの心に、好ましい、男らしい態度として強く焼きつけられた事は、この記述からも明白であろう。

かくして、一種の「所拂」的な處置を受けたムハンマド・フサインは、息子のハイダルを伴ってカーブルを發ち、ホラーサーンへと向かったのである。こうして、バーブルとハイダルの一回目の交流がおわった。父ムハンマド・フサインの反亂への參加という、おそるべき出來事にもかかわらず、この時ハイダルがバーブルについて抱いた好ましい印象は、やがて彼らの二回目の、より充實した交流を實現させる上での、いわば伏線となるのである。その意味において、この一回目の交流が、その後の二人の關係に及ぼした影響は決して少なくないというべきであろう。

さて、バーブルとハイダルの二回目の交流について敍述する前に、その交流に至るまでの主な出來事を、年表形式で示せば、以下のごとくである。

一五〇七　（五月）ウズベク・シャーヒー・ベグ・ハーン、ヘラートを征服。ティムール朝ヘラート政權滅亡。ムハンマド・フサインはホラーサーン經由でメッカへの巡禮を計畫していたが、ヘラートの陷落のため不可能となり、シャーヒー・ベグ・ハーンの招請に應じ、シャーヒー・ベグのもとにおもむく。息子のハイダルは、ウズベクのマフムード・スルターンの子で、ハイダルの姉をめとっていたウバイドゥッラーフ・ハーンに伴なわれてブハーラーへ行く。（冬）シャーヒー・ベグ・ハーン、カザーフに遠征。ムハンマド・フサインはサマルカンドに、ハイダルはブハーラーにくらす。

一五〇八　（春）シャーヒー・ベグ・ハーン、ホラーサーンに向かう。モグールのマフムード・ハーンがフェルガーナに向かったとの情報が入り、ムハンマド・フサインがこれと合流する事をおそれたシャーヒー・ベグはムハンマド・フサインをホラーサーンに呼びよせる。ムハンマド・フサイン、ハイダルをその個人教師にゆだねて出發。マフムード・ハーン、五人の子らと共

に、ホジャンド川でウズベクに殺害される。ムハンマド・フサインもヘラートでウズベクに殺害される。ウズベクはハイダルをも殺害せよとの命令を出したが、ハイダルはブハーラー市内にひそんだ後、脱出に成功。追手の追及をのがれ、苦勞に苦勞を重ねつつ、フッタラーンを經て、九一三年（一五〇七／一五〇八年）にバダフシャーンの支配權を握っていたミールザー・ハーンのもとに身をよせる。以後ここに約一年間滞在。ハイダルの到着の少し前、モグールのサーイード・ハーン（ユーヌス・ハーンの子アフマド・ハーンの子）、バダフシャーンを出發して、カーブルに向かい、カーブルでバーブルの客となる。

(二) 二回目の交流

一五〇九年夏[19]、バダフシャーンのミールザー・ハーンのもとへ、カーブルのバーブルから次のような命令がとどいた。私の〔母の〕妹の夫（beg-i yazna）、すなわちムハンマド・フサイン・ミールザーの息子がお前の所へ來ているはずだ。お前の領地がウズベクとの國境に接しているために、私は心配で仕方がない。彼がそこに滞在している事には、明らかに困難が多すぎる。彼を私たちの所へ送るようにせよ（TR, 176b/227）。

ミールザー・ハーンはこの命令に從った。かくしてハイダルは、ラジャブ月のはじめ（一五〇九年十月）（TR, 177a/228）、夜具すらも持たぬ十六名の困窮した者たちとわずか二頭の馬と共に、バダフシャーンを發ってカーブルへと向かった。ハイダルらが困窮していたのみならず、この出發に當たって、ミールザー・ハーンはハイダルのために晴衣（jāma-yi rangīn）を調達しようと努力したが、結局、彼もまた困窮の狀態にあったため、それを實現できなかったという。

ハイダルらの一行がカーブルに到着すると、彼らはまずバーブルおよびハイダルの共通のおじに當たるシーリーン・タガーイー Shīrīn Ṭaghāī の出迎えを受け、その屋敷に案内されて歡待を受けた。バーブルは人を遣し、三日後の會見を約した。三日がたち、ハイダルがバーブルの前に進み出ると、バーブルは手をさしのべて歡迎の意を表わした。ハイダル

が膝まずいてバーブルの方へ進むと、バーブルはハイダルを抱きしめて、しばらくそのままでいた。抱擁をとくと、バーブルは、ハイダルを自分の傍らに座らせ、次のように述べたという。

お前のお父さんと私のおじのハーンは殉教の苦しみをなめられた。しかしアッラーフのおかげで、お前は再び元氣で私のもとにもどって來てくれた。どうか決してあの人たちを失った事をくよくよと想いわずらう事のないように。私があの人たちの代りになってあげるから。愛情とか慈しみの點でお前があの人たちに期待していたものは何であれ、否それ以上のものを、私はお前のためにしてあげたいと思っている（TR, 177b/229）。

バーブルからこのように優しくなぐさめられると、ハイダルの心からは「孤兒のつらさも流浪の苦しみも消えうせた」(ibid) という。ハイダルは、バーブルの指示で、その場を一たん退出し、別の場所にいたいとこのサーイード・ハーンに會って挨拶を交した。そしてその後、再びバーブルの所へもどり、しばし同席して、やがてバーブルのもとを辭した。ところが、ハイダルが外に出ると、一人の男が恭しく近づいて來て、「パーディシャーフが〔貴方様の〕お住まいをお決めになっております。私はそこへの案内人（galawiz）です（TR, 178a/229）」と云って、先にたって、ハイダルを小ぎれいな家へと案内した。全ての部屋にはカーペットが敷かれ、大きなクッションや、家具、食物、衣類、それに召使いたちまでそろっていた。これを見たハイダルのよろこびは、「とても謝意を言葉では云い表わせない（TR, 178a/229）」程であったという。

こうしてハイダルは、バーブルの手厚い保護のもとに、悲嘆から解放されて「完全にリラックスして」日々を過ごす事ができた。バーブルは、特に、ハイダルに諸學問の習得をすすめ、この面でハイダルが少しでも上達すると、最高のほめ言葉を使ってハイダルを讃え、またその事を誰かれとなく云い傳えて、皆にもハイダルを賞讃させたという。ハイダルは、このようなバーブルの態度を、

當時私が享受した愛情と慈しみは、優しい父親が自分の眞の跡とり息子にそそぐような愛情であり慈しみであった

(TR, 178a/230)。

と表現している。事實バーブルは、馬で外出する時は、いつもハイダルを同行し、また人びとと會合を持つ時も、いつもハイダルを同席させた。いま一度、ハイダルの言葉を引けば、

要するに、あの方はいつも私を自分のおそばから離されなかった。例えば私の勉強の時間にも、私の勉強がおわると、すぐ私を呼びに誰かをよこしてこられた。最後の最後まで、私をまるで自分が父親であるかのごとく扱って下さった(TR, 178b/230)。

というのである。また別の箇所では、バーブルがハイダルを表向きは兄弟やおいたちと同列に扱ったが、陰ではハイダルに、まるで息子に對するように、慈父の眼をそそいでいたと述べている(TR, 200b—201a/267)。

このようにして、カーブルにおける快適な、有意義な日々が、およそ一年間續いた頃、すなわち一五一〇年十二月、ウズベクのシャーヒー・ベグ・ハーンがメルヴ近郊の戰でサファヴィー朝のシャーフ・イスマーイールに敗れ死去するという大事件が勃發した。十二月のはじめ、その情報を得たバーブルは、好機到來とばかりに、嚴冬のさ中であるにもかかわらず、ただちにクンドゥズに向け出發した。この際バーブルは、ハイダルに道路狀態がきわめて惡く、また寒氣もきわめて嚴しい折から、冬の間はカーブルに留まり、春になって自分の所へ來るようにとすすめた。いうまでもなく、なお十〜十一歳にしかすぎぬハイダルにとって、嚴冬のヒンドゥークシュ越えの旅はあまりにも嚴しすぎると、バーブルが考えたものである。しかしハイダルの、「この國で自分が寂しさに耐える事ができたのは全くパーディシャーフのおそばに居られたからです。もしパーディシャーフが行かれて私がひとり殘されたら、いったい私は誰に賴ったらよいのでしょうか」という趣旨の訴えは、バーブルの心を動かした。かくしてバーブルは、急ぎハイダルの裝備をととのえさせ、その同行を許したのである(TR, 201a/267)。

一五一一年一月、バーブルらはクンドゥズに到着。冬のおわりと共に、アム川を渡ってヒサールのウズベク軍を攻撃に

出陣した。しかし戰らしい戰もせぬままに、再びクンドゥズにもどった。この際、かつてバーブルが、そのサマルカンド脫出の條件の一つとして、ウズベクのシャーヒー・ベグ・ハーンに與えねばならなかった姉ハーンザーダ・ベギムが、シャーフ・イスマーイールのもとからクンドゥズへと送られて來た。先のメルヴ近郊での戰の際、彼女はシャーフ・イスマーイールの保護下に入っていたものである。バーブルはこの再會をよろこび、シャーフ・イスマーイールに向けミールザー・ハーンを派遣して、服從を誓い、援助を求めた。シャーフ・イスマーイールはこれを承認し、ミールザー・ハーンを援軍と共にバーブルのもとに歸還させた（TR, 183b/239）。

一方この間、ハイダルのおじサイイド・ムハンマドがフェルガーナ地方をウズベクの手から奪還したという知らせが、バーブルのもとに到着した（ibid）。このため、五月（TR, 198b/264）、バーブルは、サーイード・ハーンを、モグールの軍勢と共に、クンドゥズからフェルガーナのアンディジャーンに向け派遣した。この際、サーイード・ハーンはハイダルをも同伴する事を希望し、ハイダル自身もそれを希望したが、バーブルの許可がえられず、結局、ハイダルはバーブルのもとに留まった（TR, 201b/268）。

サーイード・ハーンの出發後、ミールザー・ハーンがサファヴィー朝の援軍と共に到着した。バーブルはこの援軍と共にヒサールを制壓し、さらにこの地でシャーフ・イスマーイールが派遣した新たな增援軍をも自軍に加え、總勢六萬の兵を以てまずブハーラーを奪回、この地でサファヴィー朝の援軍を歸國させた後、一五一一年十月、サマルカンド入城に成功した。バーブルにとっては三度目の、そして最後のサマルカンド征服であった。

この間のバーブル軍とウズベク軍との戰鬪には、ハイダルもモグールの手兵[20]を率いて參戰した。しかしバーブルはハイダルに、

お前はこういう大事に參加するにはまだ若すぎる。私の側を離れるな（TR, 186b/244）。

といって、ハイダルの身の安全を氣づかい、勝手な行動は許さなかったという。バーブルのこのような、まさに父親的な

愛情にまもられながら、ハイダルもまた、バーブルと共にサマルカンド入城をはたしたのである。[21] なお、バーブルの、この第三次サマルカンド制壓に前後して、九月ないし十月、サーイード・ハーンもアンディジャーンでその支配權を確立した。

しかし、バーブルとハイダルのサマルカンドにおける生活は、さほど長くは續かなかった。一五一二年の春と共に、ウズベクによる反攻が開始された。四月ないし五月、バーブルはキョリ・マリク Kōi-i Malik の戰で、ウズベクのウバイドゥッラーフ・ハーンに破れ、サマルカンドを捨てて、ヒサールにのがれ、この地に籠城して、再びサファヴィー朝の援軍を求めざるをえなかった。ハイダルは、キョリ・マリクの戰の際には、高熱のためサマルカンドに留まり、戰には直接には參加しなかった。しかし、バーブルがヒサールに向かうと、ハイダルも、なお病から完全に回復できてはいなかったが、バーブルと共にヒサールへとおもむいた。しかし、この地に滯在中に、アンディジャーンのサーイード・ハーンのもとからバーブルのもとへと再三使者が來て、ハイダルを派遣するよう求めた。バーブルはあまりのしつこい求めに、「とうとう怒った。そして私が去る許可を與えた（TR, 202a/268）」という。ハイダルはこの時の氣持について、「私も、子供でなお物がわかっていなかったので、それが私の當然の義務であったにもかかわらず、パーディシャーフに心よく承認してもらうという事については〔當時は〕何の注意も拂わなかった」（TR, 202a/268）と、いささか後悔の氣持を込めた記述を殘している。しかし結局、ハイダルは、ほぼ三年間にわたり、まるで父親のように自分を慈しんでくれたバーブルのもとを離れ、アンディジャーンのサーイード・ハーンのもとに向かったのである。そしてここに、バーブルとハイダルの直接的な交流は終り、ハイダルはサーイード・ハーンの無二の友人として、新たな、冒險に滿ち滿ちた人生へと出發するのである。參考のため、それ以後の主な出來事を、年表的に記せば、以下のごとくである。この年表に見えるごとく、サーイード・ハーンの歿後、カーシュガルに留まりえなくなったハイダルは、再び、バーブル歿後のムガル朝の宮廷を訪れる事になるのである。この事實もまた、ハイダルとバーブルの暖い交流のもたらした、一つの結果とみなす事ができるであろう。

一五一二　（九／一〇月）ハイダル、アンディジャーンでサーイード・ハーンに仕える。（冬）バーブル、サファヴィー朝軍と共に、ウズベクに對する反攻を開始。（一一月）グジュドゥワーン近郊の戰でバーブル敗北。ヒサールに退却。ついでクンドゥズに行く。

一五一三　バーブル、カーブルに歸る。

一五一四　（五／六月）サーイード・ハーン、カーシュガルを征服（カーシュガル・ハーン國成立）。チャルデラーンの戰で、シャーフ・イスマーイール敗北。

一五二六　バーブル、パーニーパトの戰で、ローディー朝軍を粉碎（ムガル朝成立）。

一五三〇　バーブル歿。フマーユーン卽位。

一五三三　サーイード・ハーン歿。ラシード・ハーン卽位。

一五三七　ハイダル、カーブルに至る。ついでラホールのカームラーンに身を寄せる。

一五三九　ハイダル、フマーユーンのもとに身を寄せる。

一五四〇　カナウジの戰でフマーユーン敗北し、イランに亡命。

一五四一　ハイダル、カシュミールを制壓。

一五四六／四七　『ターリーヒ・ラシーディー』完成。

一五五一　ハイダル歿。

三

さて、以上のごとく密接な交流をもったバーブルとハイダルは、それぞれお互いをどのように評價していたであろうか。まずバーブルのハイダルについての評價は、次のごとく、きわめて簡潔である。

〔フブ・ニガール・ハーヌムの〕息子がハイダル・ミールザーであった。彼は、その父がウズベクに殺害された後、

私のもとへ來て三～四年閒仕えた。後に暇を乞うて、カーシュガルのハーンのもとへ歸った。

全ては己が基(もとい)へとたちかえる
純金にせよ銀にせよ、また錫にせよ

彼は最近では悔悛して、正しき道を見つけた〔ナクシュバンディー教團の信奉者となった事を意味する〕と云われている。書道、繪畫、矢、鏃、弓の指貫などあらゆるものに彼の手は熟達していた。詩の才もあった。私の所に彼の上奏文が來ていたが、その書式も惡くなかった（BN, 11a—11b/I, 204）。

この記述から、バーブルがハイダルの多方面にわたる能力を高く評價していた事、そしてバーブルが先人の詩の一行をもって表現しているごとく、ハイダルのサーイード・ハーンのもとへの出向を、いわば自然のなりゆきと理解し、非難がましい氣持は持っていなかった事が明らかである。バーブルが、カーブルで自分を裏切ったハイダルの父ムハンマド・フサインの事を、

この人閒性に缺け正義を知らぬ男は、その命を助け與えたという私の親切を完全に忘れ、シャイバク・ハーンのもとで私の陰口をたたき、私について文句を云っていた。しかしほどなくして、シャイバク・ハーンは彼を殺し、彼にその報いを受けさせたのである。

おお汝！　汝の惡行を時の流れに寄託せよ
時の流れは汝にあだを報ずる召使なるが故に（BN, 201b/II, 152）。

とやはり詩の一行を引用しつつ手嚴しく非難しているのと比較すれば、バーブルのハイダルに對する評價が、きわめて高いものであった事が理解されるであろう。

一方、ハイダルのバーブルに對する評價は、次のごときかなり長文の記述を通じて、それを明白に知る事ができる。

彼は、種々の美點で飾られ、諸々の賞讃すべき長所で裝われた君主(パーディシャーフ)であった。その長所の中では、特に勇氣と男

らしさがきわだっていた。またトルコ語の詩では、ミール・アリー・シール以降、彼ほどにすぐれた者はいなかった。彼にはトルコ語の『詩集（ディーワーン）』があるが、まことに流麗なものである。さらに『ムバイヤン』*Mubayyan* という名の韻文の書を著したが、これは法學に關するもので、まことに有用な論文で、人々によく讀まれている。(22) 彼はまたトルコ語の韻律學の書を著したが、彼より以前に、あのようにコンパクトなトルコ語の韻律學の書を著した者はひとりとしていない。また、イーシャーン猊下〔ホージャ・アフラール〕の『リサーライ・ワーリディーヤ』*Risāla-yi Wālidiya* を韻文にした。『ワカーイー』*Waqā'i'* という名のトルコ語の史書〔すなわち『バーブル・ナーマ』〕は、まったく氣どらぬ、流暢な、明晰な言葉で書かれており、理解し易い。この本の中でも、私は『ワカーイー』からいくつかの話を引用する豫定である。彼は音樂やその他の諸學にもすぐれていた。おそらく、彼より以前に、彼の一族〔ティムール家〕に、諸々の美點において彼を凌駕する者はひとりとして存在しなかった。また彼の一族に、彼が經驗したような珍しい體驗や驚くべき冒險をした者も、ひとりとして存在しなかった（TR, 121b/173－174）。

まさに最高級の評價である。バーブルの屬したティムール家には、ウルグ・ベグ、スルターン・フサインなど學藝を愛し、自らもそれをよくした君主が多かった事實を想い浮べる時、ハイダルの「おそらく、彼より以前に、彼の一族に、諸々の美點において彼を凌駕する者はひとりとして存在しなかった」という言葉ほど、ハイダルのバーブルに對する高い評價と尊敬の念を雄辯に物語るものはないであろう。そして、このような高い評價と尊敬の念が、バーブルとハイダルとの、先述のごとき暖い人間的交流の賜物である事は、あまりにも明白と云えるであろう。人は、自らが尊敬する人々の境地に、少しでも近づきたいと願うのが常である。そしてこの願いをかなえるための最も有力な方法の一つは、いうまでもなく模倣である。このような世の習いを考えるならば、バーブルを心から尊敬していたハイダルが、バーブルを範として、種々の面でバーブルの模倣に努めていたであろうと考える事は、おそらく不自然ではないであろう。バーブルとハイダルのきわめて近い親族關係、さらにバーブルとハイダルの二回にわたるきわめて密接な交流は、この模倣の可能性をま

すます強めるものである。

もしこのように考える事が許されるならば、ハイダルの『ターリーヒ・ラシーディー』が、バーブルの『バーブル・ナーマ』を範として成ったものではないかとする推定がおのずから導き出されるであろう。しかしこれは、あくまで推定にしかすぎない。この推定をより確實なものとするためには、本稿では扱い得なかった、先の(1)(3)の検討が不可缺である。従ってここでは、本稿によって、バーブルとハイダルの密接な交流關係を明らかにし得た事、さらに兩者のお互いに對する高い評價を確認し得た事で滿足し、本稿の冒頭に提出した疑問に對する全面的な解答は、それを他日に期したい。

註

(1) バーディシャーフは「陛下」「皇帝」、ミールザーは「殿下」とでも譯出する事が可能である。

(2) 『バーブル・ナーマ』および『ターリーヒ・ラシーディー』に關する諸研究については、閒野英二「トルキスタン」『アジア歷史研究入門』4（同朋舍　一九八四）九五—九六頁および一〇九—一一一頁を參照されたい。なおその後、『バーブル・ナーマ』については、J.-L. Bacqué-Grammont (tr.), *Le Livre de Babur, Babur-nama, Mémoires du premier Grand Mogol des Indes (1494—1529)*, Paris, 1985. 閒野英二「『バーブル・ナーマ』の研究(Ⅲ) A・S・ベヴァリッジとハイダラーバード寫本」『京都大學文學部研究紀要』24、一九八五、が出ている。

(3) トゥグラート家については、閒野英二「十五世紀初頭のモグーリスターン——ヴァイス汗の時代——」『東洋史研究』23—1、一九六四、六—九頁に說明が見られる。

(4) モグーリスターン・ハーンたちの在位年代については、О. Акимушкин, "Хронология правителей восточной части Чагатайского улуса (линия Тоглук-Тимура-хана)," *Восточный Туркестан и Средняя Азия. История. Культура. Связи*, Б. А. Литвинский (ред.), Москва, 1984, стр. 156—164 が最新の研究である。

(5) TR は *Tarikh-i Rashidi* の略稱。まずブリティッシュ・ライブラリー所藏ペルシア語寫本 (Or. 157) の葉數を示し、ついで英譯本 (N. Elias and E. Denison Ross, *A History of the Moghuls of Central Asia, being The Tarikh-i-Rashidi of Mirza Muhammad Haidar, Dughlát*, London, 1895; Re-issue 1898; Rep. New York, 1970) のページ數を示す。以下 TR を引用する場合は、いずれも同樣とする。なお、ユーヌスがモグーリスターンを離れた時

の年齢を英譯本八四頁では「十六歳」とするが、原文には "sizdah sāle"（十三歳）とあり、英譯本の譯は誤りである。

（6）ホージャ・アフラールについては、川本正知「ホージャ・アフラールとアブー・サイード――ティムール朝における聖者と支配者――」『西南アジア研究』25、一九八六、二五―五〇頁を見よ。

（7）BN は *Bābur-nāma* の略稱。まずハイダラーバード本（A. S. Beveridge (ed.), *The Bābar-nāma (Fac-simile)*, London, 1905；Rep. 1971）の葉數を示し、ついで筆者による邦譯（間野英二「『バーブル・ナーマ』の研究(Ⅰ)「フェルガーナ章」日本語譯」『京都大學文學部研究紀要』22、一九八三、一八九―二四七頁、同「『バーブル・ナーマ』の研究(Ⅱ)「カーブル章」日本語譯」『同』23、一九八四、二九―二三一頁）のページ數を示す。以下 BN を引用する場合は、いずれも同樣とする。

（8）キュレゲン kürägän は、ハーン家の「女婿」を意味するトルコ語。ムハンマド・フサインは、系圖に示してあるごとく、ユーヌス・ハーンの三女フブ・ニガール・ハーヌムをめとって、ハーンの「女婿」となった。ムハンマド・フサイン以外にも、ドゥグラート家のアミールたちが、常にハーン家の「女婿」としての地位を保ち續けていた事については、註(3)引用論文、八―九頁を參照されたい。

（9）ダシュについては、G. Doerfer, *Türkische und Mongolische Elemente im Neupersischen*, III, Wiesbaden, 1967, S. 191 にその語源を中心とする解說が見られるが、「ダシュ」の關係が、具體的にいかなるものであったかは、なお明らかでない。

（10）アンダについては、ベ・ヤ・ウラヂミルツォフ（外務省調査部譯）『蒙古社會制度史』（生活社、一九四一）一三八―一三九頁を見よ。

（11）ハイダル・ミールザーの誕生地を、TR 英譯本の序說（p. 9）ではタシュケンドとし、筆者もかつてそのように記した事がある（『中央アジアの歷史』講談社、一九七七、八頁）が、正確にはタシュケンド領ウラ・テペとすべきである。

（12）バーブルの父ウマル・シャイフは、高い絕壁の上に位置したアフスィ城の鳩小屋に居る時、鳩小屋が急に倒壞し、鳩や鳩小屋もろとも、絕壁の上から谷底へと轉落して死亡した。三十九歳という若死であった。

（13）普通シャイバーニー・ハーンとして知られているこのウズベクの君主は、TR では Shāhī Beg Khān (81b, 178b など）と呼ばれ、BN では Shaybāq Khān (85a, 167a など)、Shaybānī khān (43b, 154b など）と二通りの呼稱で呼ばれている（なお、ベヴァリッジ夫人は、A. S. Beveridge, *The Bābur-nāma in English* (*Memoirs of Bābur*), London, 1922, Rep. 1969, p. 811, note 1 で、ハイダラーバード本では、英譯の一三一頁、すなわち寫本の八二葉裏までは「シャイバーニー」ないし「シャイバーニー・ハーン」の名稱が用いられ、以降のページでは「シャイバク・ハーン」の呼稱が用いられていると記しているが、實際には、例えばシャイバーニー・ハーンの名は一六二葉裏、一八五葉表などでも使用

されている。従って夫人の記述は誤りである。正しくは、ハイダラーバード本では、二つの呼稱が全く入りみだれて使用されているとしなければならない)。TR には、別に、Shaybān (179a/231 ; 207b/277 ; 209b/282) ないし Özbeg Shaybān (205b/274 ; 209b/282 ; 211a/284) という呼稱も見られる。この呼稱についてはハイダルが「ウズベク・シャイバーン——この名で指す所のものは、シャーヒー・ベグ・ハーンに從う者たち (tawābi'i Shāhī Beg Khān) の事である」(205b/274) と定義している所から考えると、「シャイバーン」とは、個人を指す名稱ではなく、一つの集團を指す名稱であった事が明らかである。とすれば、「シャイバーニー」とは、「シャイバーン集團に屬する」「シャイバーン部の」「シャイバーン家の」等々を意味する名稱、すなわち一人の人間のある集團への歸屬關係を示す名稱であると考えられる。

一方、アブル・ガーズィー・バハードゥル・ハーン Abū al-Ghāzī Bahādur Khān の『トルコ族の系譜』*Shajara-yi Turk* に、「[アブル・ハイル・ハーンの長孫の] 名 (at) はムハンマド、尊稱 (laqab) はシャーフ・バフト Shāh Bakht ——神の惠みが與えられん事を——である。彼自身、詩人であった。[ジョチ・ハーンの子] シャイバーン (又はシーバーン)・ハーンの一族の出身であったために、シャイバーニー (又はシーバーニー) ——神の惠みが與えられん事を——を自らの詩作の際のペンネーム (takhallus) にしていた (P. I. Desmaisons, *Histoire des Mongols et des Tatares par Aboul-Ghâzi Béhâdour Khân*, St. Pétersbourg, 1871—74 ; Rep. 1970, text, p. 183, tr. p. 192)」と記されている所から考えれば、シャイバーニーが「シャイバーン家の出身者」を意味するペンネームであるのに對し、シャーヒー・ベグ、シャイバクは、シャーフ・バフト (「幸運のシャーフ」の意) という敬稱の轉訛形と考える事ができるであろう。すなわち、ウズベクのアブル・ハイルの孫ムハンマドは、シャーフ・バフトという敬稱と、シャイバーニーというペンネームとを持っており、近鄰諸國では、シャーヒー・ベグとかシャイバクなどの轉訛形で呼ばれていたと考えられるのである。なお、この君主の名を、シャイバーニーではなく、シーバーニー Shībānī と讀むべきだとする主張を含む、これらの名稱についての簡單な記述が、M. E. Subtelny, "Art and Politics in Early 16 th Century Central Asia," *Central Asiatic Journal*, 27—1・2, 1983, p. 121 にも見える。

(14) バーブルは、後にこの頃の事を回想して、「私は何度か、時々の浮き沈みと、ままならぬ定めのゆえに、王位・王國・從者・從士たちから引き離され、彼ら [モグール・ハーンの一族] のもとに身を寄せた事があった。私の母も共に行かれた。しかし彼らは何もしてくれなかった。私の弟 [正しくは「いとこ」] のミールザー・ハーンとその母のスルターン・ニガール・ハーヌムは最高の、富み榮えた諸地方を所有していた。私と私の母は、地方の事はともかくとしても、一つの村、若干の牛耕地すら所有していなかった。私の母はユーヌス・ハーンの娘であり、私はハーンの孫ではなかったのか?」

(BN, 200a—200b/II, 150) と無念のおもいをこめて書き記している。

(15) この頃の諸情況については、堀川徹「ティムール朝末期の内訌をめぐって」『東洋史研究』35—4、一九七七、一—二八頁に詳しい。

(16) この戦については、C. Азимджанова, *К истории Ферганы второй половины XV в.*, Ташкент, 1957, стр. 54—56 を見よ。

(17) このバーブルのホラーサーン行きについては、間野英二「バーブルとヘラート」『オリエント』23—2、一九八一、七九—九七頁を参照されたい。

(18) バーブルは、およそ十カ月間、カーブルを留守にした。

(19) TR 英譯書（一二七頁）は、この時期を "at the end of autumn [*tirmāh*]" と譯出しているが、tir-māh はスタインガスによれば "the first summer month" (F. Steingass, *A Comprehensive Persian-English Dictionary*, London, 1892, Fourth Impression, 1957, p. 341) であるから、原文の "ākhir-i tirmāh" (TR, 176b/227) は「夏の最初の月の末」の意で、英譯書の譯は誤譯である。

(20) バーブルはハイダルに、もともとハイダルの父に屬していた約三千人のモグールの內、バーブル自身が自らのために採用した若干の有力なモグールをのぞく、殘りの內若干をその配下として與えていた (TR, 186b/244)。ハイダルの率いる軍勢は、馬、武器、兵員のいずれの面でも十分であったという (TR, 201a/267)。

(21) このバーブルらのサマルカンド入城時、シーア派のシャーフ・イスマーイールの援助を得て、トルコマン式の服裝すら身につけて到着したバーブルに對し、「マー・ワラー・アンナフルの有力者たちの心には、不快感が生じていた」(TR, 195a/259) という、きわめて興味深い事實をも、ハイダルは率直に記錄している。

(22) TR 英譯書（一七三頁）は、この部分を "He invented a style of verse called "Mubaiyan," and was the author of a most useful treatise on Jurisprudence, which has been adopted generally." と譯出しているが、誤譯である。正しくは、法學 (fiqh) に關する韻文の論文 (risāla) の題目が『ムバイヤン』というのである。

During the Qing period, county authorities were not able to carry out their duties of collecting taxes and maintaining irrigation facilities without support from the group of county elites 邑紳.

BĀBUR PĀDISHĀH AND ḤAYDAR MĪRZĀ —their Mutual Relationship

MANO Eiji

In the first half of the sixteenth century two excellent histories of Central Asia, namely *Bābur-nāma* of Bābur Pādishāh and *Tārīkh-i Rashīdī* of Ḥaydar Mīrzā, appeared. Figuratively speaking, these histories are two stars shining brightly in the sky of Central Asian historiography. Before and after them, they have no equals. Then why not only one, but also two excellent histories could appear almost simultaneously in that period in Central Asia where such histories are rare from ancient times? In order to answer this simple but important question, the author tries to examine the mutual relationship between Bābur Pādishāh and Ḥaydar Mīrzā. The author's conclusions are as follows:

1. Centering around the Moghūl Khāns, the families of Bābur and Ḥaydar associated with each other very friendly.

2. With such relationship for a background, Bābur and Ḥaydar associated closely twice: firstly between 1505 and 1507 and secondly between 1509 and 1512.

3. The participation of Muḥammad Ḥusayn, Ḥaydar's father, in the Moghūl's revolt against Bābur in Kabul broke off the first association. But the generous and humanistic attitude of Bābur toward Muḥammad Ḥusayn and others impressed young Ḥaydar.

4. In 1509 Bābur invited Ḥaydar, whose father was killed by the Uzbeg, to Kabul and took care of Ḥaydar with great hospitality. Bābur's fatherly interest in Ḥaydar removed the bitterness of orphanage and the poison of banishment from the latter's mind. Ḥaydar passed a long time in the service of Bābur, in perfect happiness and freedom from care.

Bābur always took Ḥaydar by the side of himself and encouraged Ḥaydar to study. After nearly one year's stay in Kabul, Ḥaydar accompanied Bābur on an expedition to Central Asia and entered Samarkand with Bābur triumphantly. But, being unable to hold Samarkand, Bābur retreated to Ḥiṣar, from where Ḥaydar separated from Bābur and went to Andijan to join Sa'īd Khān. Thus close and warm relationship between Bābur and Ḥaydar, which lasted almost three years, came to an end.

5. Bābur and Ḥaydar set a high value on each other's abilities. Ḥaydar in particular regarded Bābur as the most talented prince in the house of Timur.

6. Since Ḥaydar held Bābur in such a high respect, it is probable that Ḥaydar conducted himself after the model of Bābur in many respects. If it be true, it is also probable that Ḥaydar's *Tārīkh-i Rashīdī* was composed after the model of Bābur's *Bābur-nāma*.

The author wants to make certain of the last presumption by comparing the structure, contents and style of the two histories in another paper.

CONCERNING THE FOREIGN POLICY OF KING BODAWPAYA —a Study of Kingship in Burma's Konbaung Dynasty

WATANABE Yoshinari

It can be said that in the early Konbaung dynasty, through repeated foreign invasions by successive rulers, the territory of the Burmese realm was greatly expanded. Most of the previous research on this topic has attributed these wars to the ambition and bellicose character of the kings. However, the question has never been resolved of why these kings were engaged in unrelenting foreign wars that might have threatened the existence of the state itself. This essay attempts to posit one answer to this question by reexamining the foreign policy of King Bodawpaya.

A perusal of the chronicles and royal orders reveals that Bodawpaya's